メリジャパンの活動内容をご紹介

MERI Japan NEWS

―― メリジャパンニュース ――

VOL. 20
2026年
4月25日発行

interview

医の未来を切り拓く ― CSTの現場から ―

献体は希望の光。献体登録者の成願の実現を目指す不老会

公益財団法人不老会 常務理事 浅井直樹氏

会員、ご寄付のご案内 **ドクターサポーター**

未来の日本のために、高度な医療技術の安全な普及を目指す

MERI Japan

interview

医の未来を切り拓く

CST（サージカルトレーニング）の現場から

不老会は、愛知県および岐阜県美濃地方を対象とし、献体・献眼を通して医療の進歩に貢献してきたボランティア組織です。同法人では、医学生や歯学生の解剖実習、医師・歯科医師の手術手技研修を含む臨床医学の教育と研究のためにご遺体を提供しています。今回は、不老会の常務理事を務める浅井直樹氏に、ご自身が入会された経緯や活動内容、献体登録をしている方々とそのご家族への想いについてお話を伺いました。

公益財団法人不老会
常務理事
浅井 直樹

不老会常務理事。元行政職員。自身の病気を経験したことをきっかけに献体登録を行い、現在は不老会で地域活動や会員同士のつながりづくり、献体の意思を家族へ確かに伝えるための支援に携わる。また、ライフワークとして行政時代の経験を生かした「しげんカフェ」の活動を通し、地域貢献に力を注ぐ。

生きているうちに、世の中のためになることをやりたい

―― 不老会とは、どのような団体なのでしょうか?

浅井：不老会は、献体・献眼を通して医療の進歩に貢献してきたボランティア組織です。「献体」とは、医学・歯学の人体解剖教育や研究のために自分の遺体を大学に提供すること。そして「献眼」とは、目の不自由な方に角膜を提供する行為です。医学部・歯学部のカリキュラムでは「遺体解剖実習」が必ず組み込まれていることもあり、献体は、医師・歯科医師の教育・訓練のために欠かせないものとなっています。

現在、不老会は愛知県内の5つの大学（名古屋大学・名古屋市立大学・愛知学院大学・藤田医科大学・愛知医科大学）やアイバンクと連携・協働し、公益財団法人として活動しています。2026年（令和8年）3月31日時点で累計登録会員は25,886名となり、既献体者は12,213名、既献眼者は4,253名となっています。

不老会設立の背景には、愛知県の知多半島で起きた大干ばつの被害が関係しています。

不老会の創設者である久野庄太郎氏は、深刻な水不足を解消するために、用水路建設に向けての活動を開始し、無事に愛知用水を完成させることができました。しかし、その工事中、御嶽山の火山性有毒ガスの噴出が原因で5名の方が命を落とされたことを始めとして、合計で56名もの尊い命が失われてしまったのです。

不老会は、まさに命の水のために犠牲になった皆さんの魂や心に報いたいという想いと、医学の発展に貢献したいという志から設立されました。私も常務理事として活動する中で、このような先人の意志に触れています。

―― 不老会にご入会された経緯についてお聞かせください。

浅井：私は元行政の職員であり、労働組合の役員も長く務めていました。40代前半で組合の執行委員長を務めていた際、ハードな生活が原因で狭心症

を患いました。その時、自分の命には限りがあることを自覚しました。そこで「生きているうちに、世の中のためになることをしたい」と思い、当時の主治医に臓器提供の登録を相談したのですが、臓器提供者としての条件が満たせなかったのです。

それでも何か役に立てることがないか医師に聞いてみたところ、不老会の存在を教えていただきました。形は違っても、医師や医学生の方々を通じ、世の中の人々のためになるのであれば本望だと思い、不老会に入会しました。

また、私自身は浄土真宗的な価値観を持っており、「本当に価値があるものはその遺体や肉体ではない」と考えています。そのため、臓器移植や献体などに対し、初めから抵抗感がなかったことも入会の決め手だったと感じています。

―― 社会に貢献する気持ちが芽生えたのは、どのような経緯からでしょうか?

浅井:学園紛争を体験した学生時代が関係しています。当時は、学生が社会に対して異議申し立てをする時代でした。例えば、ベトナム戦争時には、沖縄が米軍の占領下にあることに対して反対運動を行っていました。当時の「社会の理不尽に屈してはいけないという精神」が、現在の「人のために役に立ちたい」という理念の根本になったのだと思います。

「献体登録者の成願」のために各地域の交流を支援

―― 不老会の常務理事としてどのような役割を担っているのかお聞かせください。

浅井:不老会では愛知県と岐阜県の美濃地域において、それぞれの地区毎に地域における活動をしています。私は、それぞれの地区の皆さんの交流を支援する役割の仕事をしています。その中で皆さんの献体の意志を尊重しながら、その想いをご家族に伝えていただくことの重要性をお伝えしています。
献体を望む方の中には、ご家族から理解が得られず、不献体になるケースもあります。これは本人の意志に反する結果であり、望ましくない状態です。献体登録された方の成願（生前に献体を登録し、亡くなった後に遺族が承諾して献体すること）を実現するためにも、ご自身で日々ご家族とコミュニケーションを取り、登録者の意志を共有していただくことを推奨しています。

献体登録は誰かの希望の光になる

―― 献体登録をする方のご家族に対し、どのようなお言葉をかけているのでしょうか?

浅井:献体や献眼がどのような社会貢献に繋がるのか、お示しすることを心がけています。私の母は献体と献眼の両方を行いました。実際に献眼によって光が戻った方の体験談を聞いた時、母が「誰かの光」になっているのだと実感しました。このような中で、私自身が不老会の会員やそのご家族とお会いした際にも、大切な人が決断した献体や献眼が「誰かの希望の光」になっていることをお伝えしています。
私はこれまでに、前立腺がんと胆管炎で二度腹腔鏡手術を受けましたが、予想以上に負担が少なく、予後も良好でした。これはひとえに、ご遺体を用いて研修を行い、医学的な知見を高めてこられた医師の皆さんのおかげだと思っています。当時の主治医に私が不老会に所

属していることをお伝えしたところ、組織の取り組みに対して大変感謝されていました。このことから私は、献体は医療技術を高め、患者さんへの貢献に繋がるものだと実感しています。

リサイクルのコスト削減と地域再生の仕組み、しげんカフェ

―― 不老会以外のご活動としては、どのようなことに取り組んでいるのでしょうか?

浅井:ライフワークとして、ごみのリサイクル活動を行っています。市役所で清掃事務所に勤めていた1980年代から2000年代当初は、ごみが増え続けるのに処理施設の建設に住民が同意してくれない、出口のない「ごみ問題」に直面した時代でした。
そのような中で、ごみを減らすために何をすべきか市民運動や住民の皆さんと一緒に考えてきました。
実際にごみを分析してみると、古紙や空き缶のようにごみにしなくてもいいものがたくさんありました。
家庭でごみを仕分けして、分別して出していただければごみの量を減らす事ができ、環境に優しいごみの処理ができることに気づきました。
（今ではごみの分別は社会の常識になり、駅やサービスエリアなどでもごみを仕分けして回収ボックスに入れるのが当たり前になっています。）
でも、家庭の資源のリサイクルは可燃ご

みや不燃ごみにくらべてかなり高いコストがかかっています。名古屋市のデータでは、資源はごみに比べて1.7倍のコスト、つまり税金が使われています。
そこで、リサイクルのコストを減らすために、住民の皆さんが各家庭で仕分けたごみを地域の資源買取センターに持参してもらう仕組みを作ったのです。「しげんカフェ」と言います。
しげんカフェでは、持ち込まれたアルミ缶や新聞などを、品目別に設定した値段で買い取ります。例えば、アルミ缶なら1kg50円、新聞紙なら1kg3円などです。しげんカフェは、土日や祭日でも市民の皆さんの都合の良い時に持ち込むことができます。
家庭でいらなくなったものが、お金になってしかも都合の良い時に持ち込むことができる、コンビニのような便利でお洒落な家庭の資源リサイクルの仕組みです。しげんカフェは自治体の税金負担がゼロです。持ち込んでいただくので、収集運搬費がかかりませんし、対面で受け取るので分別精度が高くて清潔なので、選別や保管にかかるコストも最小化できます。その上、自分のポイントを地域のこども食堂などボランティア団体に寄付する「ボランティアポイント」の仕組みもあります。高齢者や障害のある人々が働く場にもなっています。少子高齢化で限界化、消滅化の危機といわれている地域でも、人々が繋がりを希薄化している都会でも、リサイクルを通じて地域社会を支える事のできる活動を続けていきたいと考えています。

献体は、未来と現在の医学医療に役立ち人々を救う

―― 最後に、献体を希望する方やそのご家族へのメッセージをお願いいたします。

浅井：献体は、医学生の解剖実習と現役医師の手術手技研修によって未来と現在の優れた医療人を育てるための人生最期の社会貢献と言われています。
私自身としては今後も、解剖実習やサージカルトレーニングの様子や、献体によって得られた医学生や現役医師、看護師やコメディカルの皆さんの声を、会員や社会に届ける事で献体に対する理解を広めていきたいと考えています。

取材を終えて

今回のインタビューにより不老会と献体についてより深く知ることができました。浅井さんご自身のお母さまが献体と献眼をされたように、私の父も81才のとき献体と献眼をしました。お話の中で献眼により「誰かの光」になっていると聞き、涙がこぼれそうになりました。また、CSTを受講された先生から「安全に手術を行うために、CSTは必要不可欠だと感じた」とのご意見をいただいています。CSTの「いま」を伝えるメリジャパンニュースが、献体を検討されている方、決断された方とそのご家族、ご遺族、医師をはじめとする多くの方々に届くよう尽力してまいります。(H.H)

医療を育てる活動の輪に、あなたもご参加ください

メリジャパンでは、多くの方々に高度な医療を安心して受けていただけるよう、医療技術向上のための
サージカルトレーニング（CST）の実施補助をしております。ドクターサポーターとして活動にご賛同いただける方からの
ご入会・ご寄付を受け付けておりますので、ぜひご協力ください。お問い合わせをお待ちしております。

会員のご案内

正会員	総会議決権を持つ会員です。 運営にも積極的に関わっていただきます。	個人会員	5,000円
		法人会員	10,000円
賛助会員	総会の議決権はありません。 活動を支援してくださる方が対象です。	個人会員	3,000円
		法人会員	5,000円

ご寄付について

活動を推進するためのご寄付を募っています。お預りした寄付金は、CSTに必要な消耗品等の購入・環境整備等に使わせていただきます。ぜひご協力をお願いいたします。くわしくは、お電話またはメールにてご相談ください。
※当法人への寄付については、税額控除の対象にはなりませんのでご了承ください。

MERI Japan
特定非営利活動法人メリジャパン
〒464-0821名古屋市千種区末盛通2-4 はちや整形外科病院内
052-784-9627
meri_info@hachiya.or.jp